

入園予定園での在園児交流型子育て支援プログラムが
未就園児保護者に与える影響
— プログラムに参加した未就園児保護者の感想文の分析より —

田中 文昭¹・七木田 敦²

The effect of a child rearing support program, wherein preschoolers interact
with children at the kindergarten they intend to enroll in, on parents
— An analysis of the written comments of parents of preschool children who participated
in the program at their prospective kindergarten —

Fumiaki TANAKA¹, Atsushi NANAKIDA²

Abstract: In this study, we focused on the period before the transition of children from home to kindergarten life. We aimed to describe the consciousness of the parents of the children, who interacted with the children of the kindergarten into which they were planning to enroll, as part of a child rearing program (hereinafter referred to as “the program”). We also considered the effects of the program and the various considerations of implementing it. The parents were asked for their impressions of the program via a questionnaire, which was analyzed by Steps Coding and Theorization (SCAT). The results indicated that parents were able to confirm the validity of their choice of kindergarten by participating in this program. It also became clear that the parents were able to form and update their views on their own children’s development through comparison with the kindergarten children, and that these experiences were intertwined with their anxiety about their children’s current situation and their expectations of kindergarten life.

Key words: child rearing support, transition support, mixed age interaction, applicant for entering kindergarten, SCAT

問題と目的

厚生労働省の就学前教育・保育の実施状況調査（厚生労働省，2015）によると，2歳で何らかの保育施設に属する子どもの割合は約38%であるが，3歳になるとその割合が86%まであがる。これは2歳までの施設は主に保育所であったのが，3歳になると幼稚園等への就園率が加わるからであると考えられる。このように子どもが3歳になると約半数の幼児が慣れ親しんだ家庭から一斉に集団生活へ移行することになるが，この時期の集団生活への移行は子どもだけではなく，保護者にとっても喜びとともに不安を

感じやすい（塩崎，2005；田丸，2012；藤崎，2013）。

家庭から幼稚園等への移行に関する研究は多岐にわたる。例えば入園期を環境移行として捉え，当事者である子どもに着目した研究（福田・藤原・古川，1980）では，生活の基本的習慣は比較的早期に獲得されることや対人的環境に関する興味や言及は徐々に増加し，質的・量的に密度の高い交友関係が長期にわたってもたれていくことなどが明らかにされている。保護者に焦点を当てた研究では，第一子を入園させる保護者の不安や心配が第二子以降の子どもをもつ保護者よりも大きいこと（山本・石井・浅川，1978；今井，2006）や子どものことがいつも気になるなど，心理的緊張が高いこと（山本・石

1 幼保連携型認定こども園 やまなみ幼稚園

2 広島大学大学院人間社会科学研究科

井・浅川, 1978) が明らかにされている。さらに入園時期の環境について、田邊・真宮 (2012) は各園の具体的な取り組みをもとに援助の視点について検討を行い、各園の取り組みを子ども対象、園内の物的環境構成、保護者対象、園内事務に大別し示している。このように家庭から幼児施設への移行期研究は多くみられるが、これらは幼児施設に入園した移行後に着目した研究である。次に移行前後に着目した研究を概観する。これらは保護者の不安の変容過程に着目した研究であり、幼稚園への入園前後における母親個人の育児感情の変化を扱った研究(荒牧, 2008)、幼稚園への入園により生じる母親の心理的变化を扱った研究(今井, 2006)、幼稚園入園を控えた3歳児をもつ保護者を対象に家庭から幼稚園への環境移行に伴う親の関心事を検討した研究(高濱・渡辺, 2010)などである。移行前にものみ着目した研究は見当たらない。

一方で実践に関する示唆として、師岡 (2010) は、入園前のオリエンテーションとして内容や方法は新しい環境に出会う側のペースで組み立てることが必要だと指摘している。また、坂上・金丸 (2017) は子どもが入園後にスムーズに集団生活に移行するためには、園生活のイメージにつながる経験が慣れるうえで重要だと指摘している。このような指摘に応える意味でA県にあるB幼稚園では、入園を決定した未就園児親子を対象に在園児との交流(以下、本プログラム)を子育て支援の一環として実践している。幼稚園等に入園予定の子どもが、就園間近になった時期に体験的に入園し、一日の保育を受けたりするものは、一日入園などと呼ばれ、集団生活へのスムーズな移行を促す実践的な取り組みとして多くの幼稚園等で実践されている。この実践のねらいは、入園児が集団保育に入るときの不安の軽減を図ることおよび園舎に慣れ、新しい友達や保育者に接して、楽しい集団生活を迎えるという期待感と動機づけの設定にある(加藤, 2006)とされている。

本プログラムは入園予定者が入園予定園で保育を体験することから一日入園に類似した役割があるものの、未就園児親子が在園児と交流する形態をとる。田中・戸田・横川 (2013) は、未就園児親子が在園児と交流する子育て支援の中で、在園児と一緒に活動するわが子を見て、未就園児保護者は在園児を通してわが子の発達観の形成を行っていると報告している。わが子が在園児と共に活動する体験を通して、未就園

児保護者がわが子の発達観を形成しているのであれば、在園児と交流する本プログラムには未就園児保護者の不安を軽減する働きがあるものと推察される。しかし本プログラムは通常の子育て支援とは異なり、入園を決定した幼稚園でその園の在園児と交流するところに特徴がある。入園決定園での活動であるため、未就園児保護者の意識が通常の子育て支援とは異なるのではないかと推察される。しかし、入園予定者が入園予定園で在園児と活動する保育実践に関する研究は見当たらず、上述したような漠然とした推察を明確化するための先行研究は見当たらない。

田中・戸田・横川 (2011) は、地域への子育て支援に参加した保護者自身が未就園児の親から園児の親になろうとする際に、保育者はどのような準備をし、どのようなことを視野に子育て支援プログラムを立案するかを考える必要があると指摘している。本プログラムはまさにこの過渡期に実施される子育て支援プログラムである。そこで本プログラムに参加する未就園児保護者の意識に焦点化し、未就園児保護者の意識の様相を描出することで、本プログラムの効果が推察でき、入園決定後の入園予定者への移行支援の在り方や課題が明らかになるのではないと思われる。そうすることで、入園前から入園後を見据えた連続性のある移行支援プログラムの立案が可能になるのではないかと考えられる。このような問題意識から、本研究では、家庭から幼稚園への移行前の時期に着目し、入園予定園の在園児と交流する形態をとる本プログラムに参加した入園予定の未就園児保護者の意識の様相を描出する。そして描出することであぶりだされた未就園児保護者の意識により本プログラムの効果を明らかにし、入園前の移行期における子育て支援プログラムの在り方を探ることを目的とする。

方法

1 本プログラムの概要

B幼稚園では、毎年12月に翌年度4月より入園予定の子ども(以下、未就園児)とその保護者(以下、未就園児保護者)を対象に参加を募り、在園児の年長児(以下、在園児)との交流会(以下、本プログラム)を行っている。本プログラムでは、パラバルーン、プラバン作り、紙袋を使ったお面作り、マラカス作りの4つのコーナーが用意されており、対象者である未就

園児親子と在園児全員が4つのコーナーを自由に行き来することができるようになっている。意図的に未就園児と在園児がペアで活動するようなことはされておらず、自然な流れで交流ができるような環境設定がなされている。例えば、未就園児が作ったマラカスで在園児と一緒に演奏する時間が設けられている。ここでは、在園児の担当がピアノを弾き、在園児が鍵盤ハーモニカを吹いたり、未就園児は作ったマラカスを用いて合奏できたりするような環境設定となっている。本プログラムの活動にかかる時間は説明が約10分であり、交流体験は50分程度である。

2 在園児の異年齢交流経験

在園児は年少児の時から月に一度の割合で、年間を通じて全園児による異年齢交流を経験している。年長児になってからは、これとは別に子育て支援の一環として、未就園児親子との交流を5月より11月まで月に一度の割合（夏休み期間を除く）で経験している。

3 データ収集と研究方法

研究対象の実践は、2017年から2019年までの計3回とした。

本プログラム終了直後に、本プログラムに関する感想を自由記述で尋ね、質問紙でデータを収集した。質問紙には、記述欄を2箇所設け、それぞれに「本プログラムに参加されていたか」、「在園児と接することで気付いた点や自分の子どもの様子で気付いた点がありましたか」と記し、本プログラムに参加した未就園児保護者が本プログラムの特徴に意識を向けやすい形で感想を尋ねた。質問紙は活動終了後に配布し、その場で記入してもらい回収した。感想文の中には箇条書きの短いテキストが多く含まれていたため、福士・名郷（2011）の方法を参考に、箇条書きの短文テキストは意味のよく似たものを集め、言い換え、データとした。得られたデータは、アンケートの自由記述欄などの比較的小さな質的データの分析にも有効である（大谷，2019）SCAT（Steps for Coding and Theorization）を用いて分析した。SCATを分析法として採用した理由は、収集したデータが小規模であり、感想文から未就園児保護者の意識に焦点化し潜在的な思いを汲み取ることで、入園前の移行期における子育て支援プログラムとしての本プログラムの効果や機能を検討することができ、実践の改善に役立てられると考えたからである。そのため本研究では、子どもの数や出生順位によって未就園児保護者を区別して

いない。

参加した未就園児保護者の属性は、全員が母親であった。また参加した未就園児は全員が年少児からの入園決定者であった。各年度の参加者数、有効質問紙数、有効回答率を表1に示す。有効回答率は小数点第一位を四捨五入した。

表1 参加者数及び有効質問紙数

実施年度	2017年度	2018年度	2019年度
未就園児親子数	35	27	24
在園児数	75	83	84
有効質問紙数	29	25	23
有効回答率(%)	83	95	96

4 倫理的配慮

参加した未就園児保護者には活動前に、本研究の趣旨を文書で説明した。個人情報保護や研究倫理遵守に関しては、さらに口頭で十分説明し、協力は任意である旨を伝えた。そのうえで質問紙を配布し協力を依頼した。質問紙には再度、個人情報保護や研究倫理遵守に関しての文言を記載した。実施園には事前に研究の承認を得、実施園の教職員には、研究開始前に十分な研究説明を行い、同意を得た。

結果

SCATによる分析の結果、本プログラムに参加した未就園児保護者の意識の様相をストーリー・ラインにより説明する。本研究では、分析の過程で見出されたテーマ・構成概念を【】でストーリー・ラインの中に記す。ストーリー・ラインではSCATによる分析によって見いだされたテーマ・概念構成を文中に用いるため、日本語の文章としては少なからず読みにくくなっている部分が存在する。SCATによる分析の過程の例をSCAT分析ワークシートの例として表2に示す。

1 ストーリー・ライン（本プログラムにおける未就園児保護者の意識の様相）

未就園児保護者は、本プログラムへの参加によって【園選択理由の正当性確認】を行っている。【園での在園児の確かな育ち】を感じ、【期待にそった在園児の姿による充足感】を覚える時には、【保育者の努力への敬意の念】と【入園予定園の保育内容への共感的理解】によって【保育内容への信頼の芽生え】が生じ、【園との将来期待感の醸成】、【園への好感の醸成による

表2 SCAT による感想文の分析例

番号	テキスト	(1) テキスト中の注目すべき語句	(2) テキスト中の語句の言い換え	(3) 左を説明するようなテキスト外の概念	(4) テーマ・構成概念	(5) 疑問・課題
190501	子供といろんなものを作れて楽しかったです。年長さんは、一人でテキパキと作っていたので、自分の子供もそのようになるかと楽しみます。	年長さんは一人でテキパキ/自分の子供もそのようになるか	年長兄は一人で活動できる/わが子も一人で活動できるようになるかと思うと楽しみに思える	予想される園での育ちを確認/この園でよかったと確信	園選択理由の正当性確認	育ちを体験して確認→これによかった？
190702	まだ上手に順番通りに使うことが難しく、使いたかったペンを年長兄さんにとられてしまい、何も言わずに自分が年長兄さんになったとき、この時の気持ちになっただけで、少しくらいの時の気持ちに気づいて、少しでも優しくできようになっただけでよかったと思います。	年長兄さんにとられてしまい/何も言えず、この時の気持ちに気づいて/少しでも優しくできようになっただけでよかった	年長兄による思いがけない状況による咄然感/数年後の育ちに期待	稚拙な年長兄の姿への反面教師/入園する園の教育内容を信頼	稚拙な園児の姿からのがわが子への反面教師的期待感	
191401	親子共々とても楽しかったです！！大好きな絵の具もあつたので大喜びでした。子供心をくすぐる素敵なコーナー遊びでした。ありがとうございました。	親子共々とても楽しかった/子ども心をくすぐる素敵な	母子どもの幸福感/子どももの興味関心にマッチした	熟考した保育計画/参加者の共鳴	参加者同士の共鳴	年長兄も楽しめることで、さらに楽しめる環境になるのでは？
181201	子供が楽しめる遊びでよかった。絵の具は家でなかなかでききないので、幼稚園でやってもらえると助かる。	幼稚園でやってももらえると助かる	幼稚園での実施による感謝	子育て支援と同等の取り組み理解	地域の子育て支援と混同	
182002	自分のことよりも、小さい子のことを気にかけてくれた！優先してくれたい！	気にかけてくれた/優先してくれたい	やさしさ/おもしろいやり	小さい子どもと関わる機会多寡/期待以上の対応	期待にそった在園児の姿による充足感	
182202	マラカスのふたのシールをうまく止められなくて困っていると、となりにいた年長さんの男の子ふたりがよこえをかけてきてくれて、一緒に作ってくれました。先生方がお話をしてくれたことを実際にみて自然と助け合う姿勢が作られているんだと感心しました。子供もお兄ちゃんを作ってくれたとすごく喜んでいました。	一緒に作ってくれました/先生方がお話をしてくれたことを実際にみて自然と助け合う姿勢が作られているんだと感心しました	すぐに誘って一緒に活動してくれただ/冷暖自知による確認/一緒に遊ぶ楽しさを味わう	園の保育の具体的理解/期待通りの在園児の姿	園選択理由の正当性確認	説明会？などでの話の内容と実際の合致
170201	お友達を楽しそうにお絵描きやモづづくりをしていてとてもよかったです。頭で考えて絵や文字を書いている様子が見て感心しました。息子には少々難しかったようです。	お友達は楽しそう、見れて感心した/息子には少々難しかった	他の参加者は楽しそう/実際に見ること感心した/わが子が子には少し難しかった	視野の広がり/体験することでの理解/わが子を中心とした思考	わが子中心の視野思考からの解放	他の参加者とわが子との比較？
170202	お兄ちゃんおねえちゃんやと触れ合う機会だったのですが、いまは、...。一人で遊んでしまうことにも少し不安になりましたが、慣れにくいのかな、とも思っております。小さいお友達の部屋では、とても楽しそうに遊んでいました。	少し不安、慣れにくいのかな/楽しんで遊んで	入園後の不安を直視/入園後への期待	入園することへの意識化/わが子の特性の再確認/育ちへの期待	入園意識化によるわが子の現状への不安と入園後の生活への期待感との交錯	
170502	今日来ていたお友達と自ら関わって遊びに誘ってくれるお兄ちゃんおねえちゃんと自分が遊ぶことに必死になんかおねえちゃん。今日の主旨はどちらであつたかな？と疑問に思いました。"かわらわって遊ぶ"には、遊びの内容が別のものであつた方がよかつたように思ます。	遊びに誘ってくれる/自分が遊ぶことに必死/今日の趣旨はどちらか/疑問	遊びへの誘導/自己中心的な遊び方/遊びの趣旨の明確化/理解不能	期待とは異なる現状/わが中心の視野/不快な感情への自己対応	認知的不協和音への自己対応	趣旨説明の理解不足？年長兄への過剰な期待？発達の無理解？

未熟な在園児の言動への許容】【稚拙な在園児の姿からのわが子への反面教師的期待感】がみられる。このような未就園児保護者には【わが子中心的視野思考からの解放】が見られ、【入園後の園生活への期待感の増幅】が生じている。一方で、在園児への【過剰な期待感からの失望】がみられた未就園児保護者には【期待に対する認知的不協和】が生じ【認知的不協和への自己対応】をとる。

【在園児からの刺激で生じる未就園児の新たな側面】等の表出により未就園児保護者には【感情の母子間伝播】がみられ、未就園児保護者は【在園児を通してのわが子の発達観形成や更新】と【わが子の新たな一面の発見によるわが子受容】を行っている。それらは【入園に関しての明るい兆し】だけではなく【入園意識化によるわが子の現状への不安感と入園後の生活への期待感との交錯】する【入園意識化による保護者の切なる思い】となっている。しかし、冷暖自知によって本プログラムが未就園児にとって【子ども同士の関わり合いによる主体性の発揮】する場であることで、未就園児保護者には【子ども同士が関わる保育環境による子どもの多様性の気付き】がみられ、【発達の違いに気付く機会】となる。また【保育体験による保育の質の気付き】がみられることで【保育のきめ細やかさに気付く機会】ともなる。本プログラムにおいて【子ども同士の関わり合いによる主体性の発揮】が見られるためには、【在園児も楽しめる環境設定が及ぼす子ども同士の共鳴】を考慮する必要があるとともに、在園児による【未就園児との接触回数多寡による場慣れ】や継続した【異年齢交流による行動様式と経験知の獲得】が重要となる。

本プログラムには【貴重な集団遊び体験としての幼稚園での異年齢交流】としての意味合いの他に、【不特定多数との緩やかな情緒的つながり】や【参加者同士の共鳴】が重要となっている。しかし、【群れて遊ぶ経験の不足】や【異年齢交流の場の不足】により子育て支援が数多くの施設で実施されることで、【子育て支援の標準化による馴化】がみられる。そのため本プログラムには【地域の子育て支援との混同】がみられる。

ゆえに、本プログラムは【一度きりの機会での関わり難しさ】と【短時間での同朋意識醸成の難しさ】のために、すべての未就園児保護者が活動中に【子ども同士の響き合い】を感じ

られるわけではない。

2 理論記述

理論記述は一般化可能な理論ではなく、分析対象を理解するために記述するストーリー・ラインから見出される命題や定義のようなものである（大谷，2019）。本研究から見出された理論記述を下記に示す。

- ・未就園児保護者は本プログラムへの参加により自分自身の園選択理由の正当性の確認を行っている。
- ・在園児の確かな育ちを確証した未就園児保護者には保育内容への信頼の芽生えが生じ、入園後の生活への期待感が増幅される。
- ・過剰な期待感により在園児の姿に失望した未就園児保護者には認知的不協和が生じ、その対処が園への批判等として表される。
- ・在園児からの刺激により未就園児保護者はわが子の新たな一面を発見したり、在園児の姿からわが子の発達観形成や更新を行ったりする。
- ・未就学園児保護者が入園を意識化することにより、本プログラムでの活動を通してわが子の現状への不安感と入園生活への期待感とを交錯させることになる。
- ・在園児も楽しめる保育環境による子ども同士の共鳴と在園児の異年齢交流での場慣れと行動様式及び経験知の獲得が、未就園児の主体的な活動に影響を及ぼす。
- ・本プログラムは一度きりで短時間なものであるため、本プログラムの活動中に子ども同士の響き合いをすべての未就園児保護者が感じられるわけではない。
- ・子ども同士の関わりによる主体性の発揮等により、本プログラムは未就園児保護者にとって発達の違いに気付く機会、保育のきめ細やかさに気付く機会となる。
- ・本プログラムでは、不特定多数との緩やかな情緒的つながりと参加者同士の共鳴が重要である。

考察

本研究の目的は、本プログラムの参加による未就園児保護者の意識の様相を描出することによって、本プログラムの効果を明らかにし、入園前の移行期における子育て支援プログラムの在り方を探ることであった。本稿では、参加者の感想文をSCATで分析した結果、推察される未就園児保護者の意識から本プログラムの移行

期における子育て支援としての機能や今後の課題を考察する。

未就園児保護者は、本プログラムに参加し、在園児の姿を目の当たりにすることで、自己の園選択理由の正当性を確認しているものと考えられる。入園を決定しているが故に保育を直接体験することで、在園児が期待以上の姿であった場合は、自己の園選択理由の正当性が確信されることとなり、園への好感が醸成され、入園生活への期待感が増幅される。しかし一方で、その姿が期待とはかけ離れたものであった場合は、自己の園選択理由の正当性が脅かされることとなり、認知的不協和が未就園児保護者に生じ、その対処として園への苦言等が表出されるものと考えられる。本プログラムのように入園を決定した未就園児親子だけを対象とし、入園前に入園決定園で実施されたプログラムにより収集された本研究のデータはその実践の特性から、ほとんどのデータが肯定的な意見であったのは、上述したような自己の園選択理由の正当性の確認が働いていたからであると推察される。また、このような未就園児保護者の意識や本プログラムには、一度きりの短時間での実施であるという限定性があるため、参加した未就園児保護者に本プログラムの趣旨が十分に浸透しておらず、在園児や園への過剰な期待や誤解が生じやすくなったと思われる。実施の際には、本プログラムについての丁寧な趣旨説明とともに子どもの発達に言及した十分な説明を事前にする必要があると思われる。

本研究でも田中ら(2013)の研究と同様に、在園児との関わりによって未就園児の主体性が引き出されていた。しかし、在園児との関わりが未就園児の主体性の発揮を促進するためには、未就園児の異年齢交流経験の多寡だけではなく、在園児に異年齢交流への場慣れと行動様式及び経験知の獲得が必要であるとともに、本プログラムの環境が在園児も楽しめる環境であることが重要な要素であることが明らかとなった。このような交流相手となる在園児に上記の3つの条件がそろうことで、未就園児の主体性の発揮が促され、未就園児親子とともに在園児も含めた参加者のすべてが共鳴しあうプログラムになるものと思われる。そのため、具体的には、南館(2001)が指摘するように、在園児が未就園児(親子)と関わる機会を教育課程の中に継続的に設け、入園決定後も複数回にわたって、在園児と未就園児親子とが関わる機会を保

障することが考えられる。そしてそのなかで、在園児と未就園児親子の関わりの時間を段階的に広げ、関わりの質を深めていくことで本プログラムが両者にとって互恵性あるものとなり、緩やかに在園児の異年齢交流への場慣れと行動様式及び経験知の獲得が促され、本プログラムが未就園児保護者にとって緩やかに入園への期待を醸成する移行的支援となるのではないかとと思われる。

限界と課題

本プログラムは未就園児にとっても幼稚園への移行的支援の側面があるものと思われるが、本研究では未就園児保護者のみを研究の対象としたため、未就園児への効果については明らかにすることができなかった。今後は未就園児への効果も調査し、本プログラムの未就園児親子への移行的支援としての機能を検討していきたい。また、本研究で用いたデータは1園における特徴的な実践であるとともに小データであるがゆえに、一般化するには限界がある。

引用文献

- 荒牧美佐子(2008)幼稚園への入園前後における母親の育児感情の変化. 家庭教育研究所紀要, **30**, 139-149.
- 福士元春・名郷直樹(2011)指導医は医師臨床研修制度と帰属意識のない研修医を受け入れられていない—指導医講習会における指導医のニーズ調査から—. 医学教育, **42**(2), 65-73.
- 福田廣・藤原武弘・古川雅文(1980)幼児の新環境適応に関する微視発生的研究. 山口大学教育学部研究論業, **30**(3), 1-10.
- 藤崎春代(2013)子どもが家庭に持ち込む園生活が親に与える影響. 昭和女子大学生活心理研究所紀要, **15**, 33-44.
- 今井麻美(2006)家庭から幼稚園への移行期における子どもを持つ母親の心理的变化. 乳幼児教育学研究, **15**, 97-105.
- 加藤敏子(2006)保育用語辞典. 谷田貝公昭(監修). (PP18). 一藝社.
- 厚生労働省(2015)就学前教育・保育の実施状況(平成25年度). 保育をめぐる現状.
- 南館忠智(2001)幼稚園にける子育て支援—在園児に意味ある支援の創出—. 初等教育資料. 東洋館出版社, 78-84.
- 師岡章(2010)保育者と保護者の“いい関係”

- 保護者支援と連携・協力のポイント. 新読書社.
- 大谷尚 (2019) 質的研究の考え方 研究方法論から SCAT による分析まで. 名古屋大学出版会.
- 坂上裕子・金丸智美 (2017) 子どもの幼稚園入園という移行体験を母親はどう支えているのか. 保育学研究, **55**(3), 21-32.
- 塩崎尚美 (2005) 母親の子どもに対する分離不安の変化と成人期発達. 相模女子大学紀要, A, 人文・社会系 **69**, 61-72.
- 高濱裕子・渡辺利子 (2010) 家庭から就学前施設への環境移行—幼稚園入園をひかえた子どもをもつ親の関心—. お茶の水女子大学人文科学研究, **6**, 95-106.
- 田丸尚美 (2012) 幼稚園への入園が子育てにもたらすもの: 幼稚園保護者会による「子育てトーク」の実践から. 福山市立女子短期大学紀要, **39**, 55-60.
- 田邊麻未・真宮美奈子 (2012) 幼稚園における3歳児受け入れ前の準備に関する研究. 山梨学院短期大学研究紀要, **32**, 93-104.
- 田中文昭・戸田有一・横川和章 (2011) 子どもの縦のつながりが紡ぐ未就園児保護者への発達展望支援—幼稚園での子育て支援実践参加者の声からの考察—. 学校教育学研究, **23**, 63-70.
- 田中文昭・戸田有一・横川和章 (2013) 幼稚園での異年齢交流型子育て支援プログラムにおける未就園児親子と在園児との関わり—行動観察記録の M-GTA による質的分析—. 保育学研究, **51**(2), 257-269.
- 山本多喜司・石井眞治・浅川潔司 (1978) 環境認知の微視発生的発達に関する研究 (3): 新入園児の母親の幼稚園環境の認知. 広島大学教育学部紀要 (第1部), **27**, 161-167.

謝 辞

本研究にご協力いただいた B 幼稚園の保護者の皆様と保育者の皆様に感謝申し上げます。